

医療法人 共栄会 **名手病院**

総合内科を基本に人工透析やリハビリテーション、在宅・訪問サービスを加えた4本柱が当院の展開するチーム医療です。1980年の開院以来大切にしてきた理念「やさしさと思いやり」を胸に、地域医療の拠点を目指しています。

業種 医療・福祉 所在地 紀の川市名手市場294-1 TEL 0736-75-5252 FAX 0736-75-2111

従業員 正規192名(男74:女118) / 非正規75名(男33:女42)

結婚・子育てのための取り組み 育児休業 / 男性の育児休業 / 産前産後休業 / 変形労働時間勤務 / 時間単位の有給休暇
勤務中授乳の有給化 / 出産祝い金 / 公休の増設

WEB <http://nate-hospital.com>



ワークライフバランスの周知徹底で より働きやすく、子育てしやすい環境に



支援の形の「見える化」で、男性の育児休業利用者も

平成29年に和歌山県看護協会のサポートを受けて、ワークライフバランス推進ワークショップに参加し、より働きやすい雇用環境へと整備することにしました。当院の働きやすさとしては、休みの多さや残業がないことなどが挙げられると思います。それに加えて、個々のスキルアップへの手厚いサポートもモチベーションの1つになっているのではないのでしょうか。

例えば看護師ですと、時間内の研修などは出張扱いとなり、参加費は病院で全額負担します。また、eラーニングでのオンデマンド学習を好きな時間帯で受けられるようにしましたが、これは育児休業中の職員にも復帰前に少しずつ勉強してもらおうにも繋がりました。

その他にも、病院としてどんな形

で職員の支援ができるのかを記載したリーフレットを作って食堂に掲示したり、年4回のワークライフバランス新聞を発行するなど、子育てに関するさまざまな情報を発信していきました。このように活動を見える化したことで、男性でも育児休業の取得ができることが周知され、ついに今年、男性看護師で初の制度利用者が現れました。制度を整備することがゴールではなく、実際に使ってもらい働きやすくなることが重要です。

他にもお母さんのリフレッシュを目的とした変形労働時間勤務や時間単位の有給休暇を導入するなど、より働きやすく子育てしやすい環境へと整備しました。また育児休業復帰後の保育所の受け入れ先問題についても、同グループの光栄会に整備した保育所を利用することで解消することができました。今後も職員の日線に立って、より働きやすい病院にしたいと思っています。



看護部長 / 稲垣 伊津穂さん

解消したい課題

ワークライフバランスを見直して、より働きやすい環境にしたい

- 育児と仕事の両立がしやすくなる制度やサポートの向上。
- 育児休業中でも、復帰後のスキルアップにつながる学習ができるようにしたい。
- 各種支援制度を「見える化」して職員の理解を高めたい。

課題への取り組み

育児支援制度の充実と、その周知徹底

- 看護職のワークライフバランス委員会を作って、**制度の周知を徹底**。
- 変形労働時間勤務や時間単位の有給休暇など、**より働きやすい環境へと**制度を充実。
- 同グループに整備した保育所の利用**で、育児休業からの復帰をサポート。
- オンデマンド学習**で育児休業中でもスキルアップのための学習ができるように。
- 男性職員でも**育児休業が気軽に取得できることを周知。(以前は有給休暇で対応)。
- 勤務中の**授乳(1時間)を有給化**。

導入成功のアイデア

●当院は看護職、リハビリ職あわせて50人前後の男性職員がいるので、職場結婚も多く、ワークライフバランスの整備は直接家庭環境に直結するため、反響も大きかったです。

導入の成果

働き方に合わせた支援で職員の意識が少しずつ変化

- さまざまな制度の利用者が増え、**働きやすくなった**という声が聞けた。
- リーフレットや新聞の作成で、見る側だけでなく作る側の勉強にもなり**職員全体の意識改革**に。
- これまでなかった育児休業の**男性の取得実績**ができた。
- 受け入れ先となる保育所があるため、**入所のタイミングを考えずに仕事復帰**ができるように。

現場の声

【育児休業を利用した看護師の竹本さん】

育児に関わることで気づくことが多かった



2人目の子供が生まれるに当たって、上の子供の面倒と妻のフォローができるようにと2週間の育児休業を取得しましたが、育児にしっかりと関わってみると、これまで気づけていなかった目に見えない大変さがたくさんありました。

たし、離乳食を作ってみても食べてくれないなど、子供の気持ちは難しいものだ実感しました。終われば帰れる仕事と違って、育児には逃げ場がないことにも気づけました。

今後、子供が生まれる男性職員には「(育児休業を)取れるのであれば取ろう」と言ってあげたいです。そして育児に関わることで私のように実感してもらいたいです。育児はやった気だけでいいのではなく、初日から1から10までやってみて気づくことがありません。私も今はできるだけ休みを取って、妻の逃げ場を作ってあげるようにしています。

